

あたり、赤ずきんちゃん

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

赤ずきんちゃんがスキップしながら森にやって来ました。

あたち、  
赤ずきんちゃん

目次

1

あたち、赤ずきんちゃん

ピンクのエプロンをして、バスケットを提げた赤ずきんちゃんが、スキップしながら森にやって来ました。

赤ずきんちゃんは森が大好きです。生い茂る草花、みずみずしい木々の葉、小鳥たちのさえずり。もう、白雪姫になった気分です。

暗くなつて、赤ずきんちゃんは道に迷ってしまいました。

「えくん、ママっ!」

しばらく行くと、小さな家がありました。月に浮かんだ煙突からは、煙がたなびいていました。

赤ずきんちゃんは一晩泊めてもらおうと思い、ノックしました。

「どなたじゃ?」

おばあちゃんの声がありました。

「道に迷ったの」

「あらら、それは大変、大変」

そう言つてドアを開けたおばあちゃんは、比較的口が大きめでした。

「プッ! ガツハツハツハ!」

失礼なおばあちゃんですね。赤ずきんちゃんを見るなり、腹を抱えて笑い転げました。

どうしてなのか、赤ずきんちゃんを見てみましょう。

ウワツハツハ! こりや笑われて当然だわ。なぜって、被った赤ずきんを鼻の下で結んでんだもん。まるで、ねずみ小僧みたい。それに、60は過ぎてるばあさんです。

「あたち、赤ずきんちゃん。道に迷っちゃったみたい」

「ボケのケありか。名前は?」

「あたち、赤ずきんちゃん」

「歳は?」

「……………いと、いと……いちゆちゆ（5つ）」

「駄目だ、こりや。相当来てんな。食ってもマズそうだし、どうすつか……」

「あたち、赤ずきんちゃん。道に——」

バタン！

おばあちゃんは、非情にもドアを閉めてしまいました。

「……………あたち、赤ずきんちゃん。道に迷ってる最中よ」

しかし、ドアは開きませんでした。

仕方なく、家の前で朝を待つことにしました。

おばあちゃんの家からは、おいしそうな匂いがしています。

グウ………

赤ずきんちゃんの腹の虫の声です。この空腹に勝てるのは、パーし  
かいません。一日中歩いて疲れたのでしょうか、赤ずきんちゃんはい  
つの間にか眠ってしまいました。

夜明けと共に目を覚ました赤ずきんちゃんは、急いでおうちに帰  
りました。

間もなくして、二人のお巡りさんが、比較的口が大きいおばあ  
ちゃんの家に来て来ました。ノックをすると、

「どなた？」

おばあちゃんの声です。

「あ、駐在所のもんですが」

「……………」

ゆっくり開いたドアの向こうには、びっくりした顔のおばあちゃん  
がいました。

「な、何か？」

「赤ずきんちゃんを見ませんでしたか？」

「どの？」

「……………どの、と言うと？」

「あ、いや。つまり、赤ずきんちゃんを何人か見かけたから……」

おばあちゃんからは何か焦りあせのようなものが窺うかがえました。

「探しているのは、年寄りの赤ずきんちゃんです」

「……ああ、昨日のね？　ちよっとイカれちゃってる——」  
すると、突然、

「あたり、赤ずきんちゃん」

と、お巡りさんの後ろに隠れていた、もう一人が、声を発しました。  
おばあちゃんがびっくりしていると、美しい婦警さんが、ニツと笑った顔を覗かせました。

「えっ？　今なんて？」

突発性難聴だと思っただおばあちゃんは、聞き返しました。

「あたり、赤ずきんちゃん。あなたを逮捕するわ」

「えー……ッ！」

「早く、手錠しろっ！」

美しい婦警さんは、男言葉でお巡りさんに命令すると、

「おお、かみツ、証拠は拳がつてるんだ、観念しなっ！」

そう言っつて、おばあちゃんの口に持っていたタオルを押し込みました。これは、舌を噛み切らせないためにする手段です。

「ムグムグ……」

おばあちゃんは観念したのか、取調室でうなだれています。そこにやって来たのは、先程婦警の格好をしていた、美しい刑事さんです。

「おお、かみつ、赤ずきんちゃんを何人殺やった」

「いいえ、私は何も」

おばあちゃんは、首を横に振りました。

「この一ヶ月で、6人が行方不明になってる。〈赤ずきんちゃん伝説〉がある、あの森でだ。年齢も15〜48と幅が広い。だが、共通するのは、皆赤いずきんをした女や少女つてことだ。おお、かみつ、どうして赤ずきんちゃんばつか狙った？」

「さあ、……なんのことか」

そう言っつて、おばあちゃんは首をかしげました。

「……まで来て、まだとぼけるつもりか？　ったく往生おうじょうぎわ際が悪いな」

美しい刑事さんは、ポケットから小型のテープレコーダーを出すと、ボタンを押しました。

『駄目だ、こりや。相当来てんな。食ってもマズそうだし、どうすつか……』

「こつ、これはっ！」

おばあちゃんはうろたえています。

「紛れもなく、あんたの声だ」

「ど、どうしてこれを？」

「つたく。まだピーンと来ねえのか？」

「……？」

「ゆんべの赤ずきんちゃんは、この私よ」

「えー！ーッ！ ああ、ババアが？」

「ボケたババアに化けて潜入したのよ。つまり、おとり捜査って奴だ。まんまと引っ掛かったな」

「チキショー、やられたっ」

おばあちゃんは悔しそうな顔をしています。

「で、何人殺ったんだ？」

「……5〜6人」

「48歳も殺ったのか？」

「ああ。一見若く見えただんで食ってみたが、マズいのなんのつて。だから、ババアのあんたはもつとマズいだろうと思って、殺らなかつたのさ。こんな美人だと知ったら、舌鼓したつづみを打つてたぜ」

「あいにくだったな。おお、かみ、人間の歳でいくつぐれえだ？」

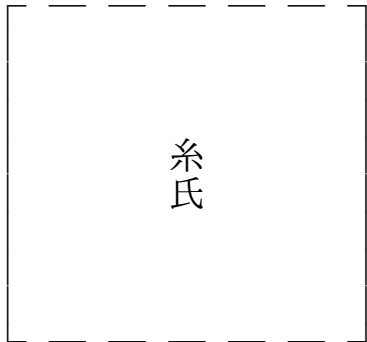
「30前後つてどこじやねえか？」

「私と大して変わんないじゃん。恋人とかいないの？」

「……いたが、フラれちゃってさ。やけになつて、人間様に手をつけちゃったのよ。口外を防ぐために殺るしかなかった。そして、腐乱防止も兼ねて食つたってわけさ。なんで赤ずきんばつか狙つたかつて聞いたよな？ 別に赤ずきんを狙つたわけじゃないさ。あの森に来る、すべての女が赤いずきんをしてただけさ。なぜなら、紅花染めを売りにした、“村おこし”の一環として、みやげ屋には、赤いスカーフや

ハンカチしか売ってないからさ。それに、赤ずきんを被った観光客を見かけた村人のサインが10個で、1,000円の商品券がもらえるポイント制だもん、誰だって赤いずきを——」

死刑を覚悟したのか、おばあちゃんに扮した、折り紙の狼はペラペラ喋りながら、



元の紙に戻っていた。